

## 12月28日(日) サムエル記第一14章38~42節

「今日、どうしてこの罪が起こったのかを確かめてみなさい。」(38節)

サウルは神がお答えにならない理由は、自分自身の御前における態度や罪から出ているとは思わず、民のうちの誰かが罪を犯したからだと考えました。そこで民のかしらたちを呼び集め、「今日、どうしてこの罪が起こったのかを確かめてみなさい。」と言ひ、39節では「たとえ、それが私の息子ヨナタンであっても、必ず死ななければならぬ」と言ひます。もしかすると、サウルもヨナタンの行動を不審に思ひ、疑っていたのかも知れません。調べた結果、サウルとヨナタンが取り分けられ、(41節)最後にはヨナタンが取り分けられました。(42節)

マタイの福音書7章3~5節でイエスさまは、「偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取り除くことができます。」と言われました。私たちは、自分の罪を棚に上げて、人の罪ばかりを気にすることがあります。しかし、人のちりのような罪を指摘する前に私たちは主の御前に出て自分の梁のような大きな罪を除いていただかなければなりません。それとともに、周りの兄弟姉妹が仮に罪を犯しているとしても私たちと何の関りがあるのでしょうか。罪をその人に知らせ、悔い改めるならその罪を赦す権威を持ち、また罪に対して正しいさばきを与えられるお方は、主なる神様だけです。まずは、自分自身が主の御前にいかに歩んでいるかを常にみことばを通して確認し、罪を悔い改め、主の御前に正しく歩ませていただきたいと思われまひます。

## 12月29日(月) サムエル記第一14章43~46節

「この大勝利をイスラエルにもたらしたヨナタンが死ななければならぬのですか。絶対にそんなことはあり得ません。主は生きておられます。あの方の髪の毛一本でも地に落ちてはなりません。今日、あの方は神とともにこれをなされたのです。」(45節)

サウルは何があつたのかヨナタンに確認し、ヨナタンは父サウルの断食令に反して少しばかりの蜜を口にしたことを話します。そして「この私が死ななければなりません」と言うヨナタンに対し、サウルは「ヨナタン、おまえは必ず死ななければならぬ」と死をもつて報いることを宣言します。それに対して民は猛反発します。民はサウルの権威を恐れて断食の命令に従いましたが、心の中では理不尽な命令だと思つていたはずです。それと同時に、ここで「この大勝利をイスラエルにもたらしたヨナタン」と言ひ、この勝利はサウルの働きではなくヨナタンによることを民は知つていました。さらに「今日、あの方は神とともにこれをなされたのです。」とありますように、ヨナタンの神への信仰によつて、この大勝利がなされたと思はれることができたのです。

私たちも日々の歩みの中で、信仰をもつて一つ一つのことをなして行く時に、それが必ず周りの兄弟姉妹や友人、地域の方々への証しとなつていきます。そして、そのことを通して「あの方は神とともにこれをなされたのです」と言われて、それが主への賛美となつていきます。そのようにして私たちの生涯を通して、自分がなしたことにより主があがめられ、主がたたえられるなら、こんな幸いなことはありませぬ。

## 12月30日(火) サムエル記第一14章47～52節

「さてサウルは、イスラエルの王権を握ってから、周囲のすべての敵と戦った。モアブ、アンモン人、エドム、ツォバの王たち、ペリシテ人と戦い、どこに行っても彼らを敗走させた。」(47節)

47、48節には王としてのサウルのめざましい活躍が記されています。民がサムエルの言うことを聞こうとせず、王を望んだ時に「王が私たちをさばき、私たちの先に立って出陣し、私たちの戦いを戦ってくれるでしょう。」(8章20節)と言い、そのような王を望みましたが、ある意味サウルは、そのような民の期待に答えるような働きをしたと言えるでしょう。49～51節には、サウルの家族構成が記されていて、そして52節には、サウルの一生の間、ペリシテとの激しい戦いがあったことと、サウルは勇気のある者や、力のある者を見つけると、その者たちを召しかかえていたことが記されています。

敵と戦って、その敵を次々と敗走させたり、イスラエル人を略奪者の手から救い出したり、(48節) 勇気のある者や力のある者を召しかかえて、軍としての体制を整えるなど、サウルは確かにすぐれた有能な王であったことがよく分かります。しかし、13章13、14節を見ますと、主はサウルを拒まれていたことが分かりますし、恐らく彼は自分の力や能力によって、また召しかかえた家来たちの働きを通して戦いにおける勝利を重ねていたのではないかと思います。主は、サウルのような驚くべき働きを私たちに期待しておられません。またキリスト者としての教会や外部での功績やすばらしい働きを主は求めてはおられません。むしろ、主のみこころと一つになって歩み、主のみこころに従う者を求めておられるのです。つまり主が見られるのは、私たちが主にいかに忠実であったかということです。またサウルは一生の間、ペリシテとの激しい戦いがあったように、私たちもクリスチャンとして世との戦いやサタンとの戦いがあり、自分の力で戦おうとすれば、敗北し、疲れ果ててしまうことでしょう。だからこそ私たちは主と一つになって戦わなければ勝利することはできないのです。

## 12月31日(水) サムエル記第一15章1節

「主は私を遣わして、あなたに油を注ぎ、主の民イスラエルの王とされた。今、主の言われることを聞きなさい。」

サウルは、油注ぎをもって主の民イスラエルの王とされました。ここでサムエルは、「今、主の言われることを聞きなさい」と言います。つまり、王であるサウルは、サムエルを通して語られる主のことばを聞き、それに従うことが求められていました。主は、今も主の教会において、牧師、宣教師、伝道師、教師を遣わし、彼らを通してみことばを語ろうとしておられます。そのみことばを私たちは聞かなければなりません。そのために必要なことは、主の御前に謙遜に出て聞くということです。主への恐れのない傲慢な態度では、決して主のことばを聞くことはできません。そして、聞くことにおいて大切なことは、聞いたことに従うということです。主は、聞くすべての者が従うことを期待して語られます。ですから私たちも語られたことを受けて、それに応答して聞き従う信仰者でありたいと思わされます。

サウルは以前に大きな失敗をして、サムエルから「愚かなことをしたものだ。あなたは、あな

たの神、主が命じた命令を守らなかった。主は今、イスラエルにあなたの王国を永遠に確立されたであろうに」(13章13節)と言われてしまいました。しかし、その失敗によって主はサウルを完全に見捨てたわけではなく、もう一度サムエルを遣わし、主は語り、その命令にサウルが従うことを期待されていたのです。私たちも罪深い者であり、主の御前に過ちの多い者ではありますが、主は決して見捨てず、聞き従うように常に御声をもって語り続けていてくださいます。いよいよ明日から新しい主の年2026年が始まります。みことばからともに主の細き御声を聞き、それに聞き従う者でありたいと思わされます。

### 1月1日(木) サムエル記第一15章2, 3節

**「今、行ってアマレクを討ち、そのすべてのものを聖絶しなさい。容赦してはならない。男も女も、幼子も乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも殺しなさい。」(3節)**

2節で「イスラエルがエジプトから上って来る途中で、アマレクがイスラエルに対して行ったことを覚えている」と言われます。このことについては、出エジプト記17章8節「さて、アマレクが来て、レフィディムでイスラエルと戦った」とあり、申命記25章17～19節にもそのことが記されています。旅の途中でイエスラエルが疲れて弱っている時に戦いを仕掛け、落伍者を切り倒すようなことをしました。このことをアマレクの罪として主は記憶され、そのことのゆえに主はアマレクにさばきを与えようとしたのです。当時は戦いに勝利しても、普通は子どもと女は生かしておいたようです。また、人間的な感情からすれば、女性や幼子、乳飲み子を殺すということは忍びないと思うでしょう。しかし、主は男も女も幼子、乳飲み子も家畜に至るまで殺すように命じ、容赦してはならないと言われます。まさに聖絶とは、すべてのものを殺し、すべてのものを完全に滅ぼし尽くして、主に献げる行為を指しているのです。

私たちは、聖絶と聞きますと非常に残酷で愛の神にはふさわしくないと考えます。しかし、私たちが考えなければならないことは、聖絶とはまさに神の義と聖さの現れであるということです。またアマレクに対する聖絶とは、神のアマレクに対するさばきであり、神はそれをしつかりと覚えておられて、容赦のないさばきを彼らに下されるということです。それをサウルによって主はなそうとしておられたのです。このように旧約聖書に記されている聖絶は、最後には神を信じない者への永遠の滅びとして、容赦のないさばきとなって現れます。しかし、主はあわれみと恵みによる選びをもって、今も人々を罪から救うことをみこころとなさっていることをおぼえつつ、新しい年に一人でも多くの人がイエスキリストを信じて罪が赦されるように、祈りつつ、福音を伝えてまいりましょう。

### 1月2日(金) サムエル記第一15章4～6節

**「さあ、アマレク人のもとを離れて下って行きなさい。私があなたがたを彼らと一緒にするといけないから。あなたがたは、イスラエル人がみなエジプトから上って来たとき、親切にしてくれたのです。」(6節)**

サウルが兵を呼び集めると、歩兵が二十万、ユダの兵が一万でした。(4節) ペリシテの攻撃の時には三千人しか集まらず、最後には六百人になってしまったのとは大違いです。

アマレク人を攻撃する準備を整えたサウルは、その町に住むケニ人に避難を勧めます。モーセのしゅうとイテロもケニ人で、ユダ族と一緒に住んだりもしていました。(士師記1章16節参照) デボラの時代には、ケニ人ヘベルの妻ヤエルが、イスラエルに敵対したハツオルの王シセラを殺しました。(士師記4章11～21節参照) 恐らくサウルはケニ人がどれほどイスラエルに好意を示したかを覚えていて、ここでケニ人にあわれみを施したのでしょう。

昨日見ましたように、主は罪を決して忘れず、最後には徹底的なさばきをもって滅ぼされますが、その一方で主はご自分のためになした愛のわざを決して忘れることなく豊かなあわれみと祝福をもって報いてくださいます。しかし仮に私たちが主のために何かをしたとしても、それは決して私たちが主の報いを求める根拠とはなりません。ですから、もし主が私たちに報いてくださるのであれば、それは一方的な主からの恵みなのです。主は罪も忘れられませんが、愛のわざ、善きわざも忘れられることはありません。主の恵みに心から感謝しましょう。

### 1月3日(土) サムエル記第一15章7～9節

**「サウルとその兵たちは、アガグと、肥えた羊や牛の最も良いもの、子羊とすべての最も良いものを惜しんで、これらを聖絶しようとしなかった。ただ、つまらない値打ちのないものだけを聖絶したのである。」(9節)**

まさにアマレクに対する攻撃は主のみどころでした。ですから、サウルのアマレクに対する攻撃は大成功を収めました。サムエルは、戦いの前にサウルに対してはつきりと人も家畜もすべてのものを聖絶するように命じています。(3節) しかし、理由は分かりませんがサウルと兵たちはアガグを惜しんで彼を殺さず、生け捕りにしました。さらに家畜についても、ただつまらないものだけを聖絶して、肥えた羊や牛の最も良いもの、子羊の最も良いものを惜しんで、聖絶しませんでした。すなわち主の言われたことに逆らったのです。

サウルの姿から私たちは主から大切なことを教えられなければなりません。まず一つが、冒頭にも書きましたが、アマレクに対する攻撃は主によって勝利がもたらされました。決してサウルや兵たちの働きだけによるということではありませんでした。しかし、サウルはアマレクに勝利したことに対して有頂天になり、まるで自分の力で勝利を勝ち取ったかのように思ったのでしょう。ですから主の命令に従えなかったのでしょうかし、聖絶しなかったアガグや家畜は自分の戦利品ぐらいに思ったのかもしれませんが。主の命令に従うには、人の側でのへりくだった態度がなければなりません。私たちは、主を恐れて謙遜に主の命令に従っているでしょうか。もう一つが、サウルは主の命令よりも自分の思い、考え、願いによって行動しました。私たちは、自分が惜しいと思うことについても主のみどころであれば、それを捨てることができるでしょうか。自分の思いよりも主のみどころが常に優先されているでしょうか。何よりも私たちは主のみどころに従う信仰があるでしょうか。